

社会的断絶を架橋する「地域編集」の実践的メカニズム

—相互作用儀礼と関係性エネルギーに着目した理論的検討

大正大学 影山 裕樹

要旨

本稿は、日本の地域社会で顕在化する「地元の人とよそ者」の対立に起因する社会的な分断を架橋するための理論を提示することを目的とする。地域イノベーションの文脈において、本稿は、新たな価値創造が経済的側面だけでなく、衰退した社会関係資本の再構築という社会的側面から生じることを論じる。先行研究において敷田(2009)らによる「よそ者」論と、社会ネットワーク論における「ナレッジ・ブローカー」の有効性と限界を指摘する。ナレッジ・ブローカーは情報の非対称性を解消する上で有効であるが、感情的・文化的な深い断絶が存在する場合、人的な仲介だけでは機能不全に陥る可能性がある。この限界を克服する視座として、Collins(1993)の「相互作用儀礼連鎖」、Owensら(2016)の「関係性エネルギー」の概念を参照しながら、「地域編集」という

概念を析出する。本稿において「地域編集」とは、地域資源を可視化し相互の焦点を創出する「情報の編集」と、そのプロセスを通じて感情的エネルギーを生成し社会関係資本を醸成する「関係の編集」の二重プロセスとして捉える。そのため、本稿では京都府南丹市で生まれた「集落の教科書」と、埼玉県川口市芝園団地における多文化共生の実践事例を分析し、情報の編集が関係性エネルギーへと転換される因果プロセスを分析する。結論として、地域編集は、断絶された社会関係を修復するケア的機能を有し、持続可能なコミュニティ再生に寄与するメカニズムであることを明らかにする。

キーワード：よそ者、ナレッジ・ブローカー、相互作用儀礼、関係性エネルギー、地域編集

Bridging Social Fragmentation through “Community Editing”:

A Theoretical Examination of Interaction Rituals and Relational Energy

Taisho University
KAGEYAMA Yuki

Abstract

This study addresses the deepening social fragmentation between long-term residents and “outsiders” (yosomono) in Japanese regional communities. While conventional “Knowledge Broker” theories address information asymmetry, they often fail to resolve deep-seated emotional severances. We propose a novel theoretical framework, “Community Editing,” arguing that the reconstruction of social capital requires not merely the transfer of knowledge, but the generation of “Relational Energy” (Owens et al., 2016). Drawing on Collins’ (1993) theory of Interaction Ritual Chains, we conceptualize Community Editing as a dual process: (1) Information Editing, which converts latent resources into explicit shared foci to capture mutual attention; and (2) Relational Editing,

where collaborative interaction synchronizes emotional rhythms and generates the emotional energy (EE) necessary to bridge structural holes. Through case studies of the “Village Textbook” in Kyoto and multicultural projects in the Shibazono Housing Complex, we demonstrate how community editors function as “Energizers” who transform friction into solidarity. The findings suggest that sustainable regeneration depends on designing interaction rituals that replenish the community’s collective energy, reframing regional innovation as a dynamic process of social care.

Keywords: Community Editing, Interaction Ritual Chains, Relational Energy, Knowledge Broker, Social Capital, Energizer

1 研究の背景

1.1 問題設定：社会的断絶の進行と構造的空隙

現代の日本社会、とりわけ地方部や都市近郊の地域社会が直面している課題は、人口減少や少子高齢化といった量的な縮小均衡にとどまらない。より深刻かつ不可視な問題として進行しているのは、コミュニティ内部における質的な分断、すなわち「社会的断絶」である。かつては地理的な境界と血縁・地縁によって均質性が保たれていた地域社会（ムラ）は、ライフスタイルの多様化、経済格差の拡大、そしてグローバル化に伴う住民構成の流動化によって、その凝集性を喪失している。

特に顕著なのが、「地元住民（内部者）」と「よそ者（外部者）」の間に横たわる深い溝である。ここで定義する「よそ者」とは、都市部からのU・Iターン移住者、地域おこし協力隊員、あるいは外国人労働者など、多様な背景を持つ新規参入者を指す。

総務省によれば、地域おこし協力隊の隊員数は2024年度に7,910名と過去最多を更新し、年々増加している。また、直近5年間の地域への定住率は7割近くと高水準を推移している（総務省、2025）。一方、協力隊終了後の長期的な追跡調査はされておらず、実質的な定着率は統計上の数値を下回っている可能性が高い。

彼ら「よそ者」は地域社会に新たな知見や活力をもたらす潜在的なイノベーションの源泉であると同時に、既存の慣習や暗黙のルール、秩序を脅かす攪乱要因としても認識される。この両義性は、しばしば深刻な摩擦や対立を引き起こし、集落のルールを遵守しない移住者に対する排他的な対立や、移住者の早期離脱といった「リアリティ・ショック」を招いている（柴崎・中塚、2018）。いまや、「数の移動」から、それを持続的な定着に結びつけるための、紐帯の「質の向上」に眼を向ける時期に来ているのではないか。

地元住民とよそ者の対立の背景には、単なる文化的差異や好みの違いを超えた、社会構造的な要因が存在する。これは異なるクラスター間に存在する「構造的空隙（Structural Holes）」の問題として捉えることができる（Burt, 2004）。地元住民のコミュニティは、同質性が高く結合の強い「結束型（Bonding）」の社会関係資本で結ばれている一方、よそ者との間には接点がなく、情報の非対称性や相互不信が生じやすい。この空隙を埋め、異なる背景を持つ人々を結びつける「橋渡し型（Bridging）」の社会関係資本（パトナム、2006）をいかに構築するかが重要である。そのため、地域社会においては、ますます、異なる立場の人々を結びつける人的な「媒介機能」の重要性が増していると考えられる。

ただし、ここで留意すべきは、「地元の人」や「よそ者」

というカテゴリー自体が、決して一枚岩ではないという点である。地元住民の中にも旧来の有力者と新参の住民との間に階層差が存在し、よそ者の中にも、地域おこし協力隊のような制度的移住者と、個人的な動機による移住者では、地域内でのパワーバランスが異なる。本稿では、便宜的に「地元／よそ者」という図式を用いるが、その内部には常に流動的なグラデーションと権力関係が内包されていることを前提にしている。

1.2 既存研究の限界と本稿の目的

本稿では、従来の「つなぎ手」人材論の限界を指摘し、そこから、異なる立場にある人々の関係性のエネルギーを充填する存在を「地域編集者」としてとらえることを試みる。

これまで、このような地域社会における媒介者の役割については、「よそ者」論（敷田、2009）や、組織論における「ナレッジ・ブローカー論」の文脈で議論が蓄積されてきた。これらの研究は、外部の異質な知識を内部に持ち込むアクターの重要性を指摘した点で意義深い。しかし、現実の地域社会における断絶は、合理的な次元を超えた、感情的な次元での拒絶反応を含んでいる。既存のナレッジ・ブローカー論は、情報の伝達効率やイノベーションの創出を重視するあまり、情報の受け渡しに伴う「感情的ダイナミクス」や「関係性の質」、そして媒介者自身のエネルギー管理の視点を十分に扱ってこなかった。

そこで本稿では、以下のリサーチ・クエスチョン（RQ）を設定し、理論的検討と事例分析を行う。

RQ：言語的・文化的背景が異なり、相互不信や無関心が支配する「構造的空隙」のある地域社会において、いかなるアクターが、どのようなメカニズムを用いて「コミュニケーションの回路」を開き、社会的断絶を架橋するのか？

1.3 本研究の構成

本稿の目的は、従来のナレッジ・ブローカー論が暗黙のうちに前提としていた「コミュニケーションの回路」や「信頼の基盤」が欠如した状態から、いかに関係性を構築するかという問いに向き合うことにある。そのために、媒介者の機能を「情報の伝達能力」から「感情の喚起能力」へと視点を転換し、Collins (1993) の「相互作用儀礼連鎖（Interaction Ritual Chains）」および Owensら (2016) らが提唱する「関係性エネルギー（Relational Energy）」の概念を参照しながら、「地域編集」という新たな実践概念の定式化を試みる。

本稿の構成は以下の通りである。第2章では先行研究

を概観し、ナレッジ・ブローカー論の限界と、感情・エネルギー論の可能性を論じる。第3章では、これらを地域社会に適用しうる概念として「地域編集」を仮説的に提示する。第4章では、京都府南丹市と埼玉県川口市の事例分析を通じてモデルの妥当性を検証し、第5章で考察、第6、7章で結論と政策的・学術的インプリケーションを述べる。

2 先行研究：つなぎ手論の限界と可能性

2.1 「よそ者」論の継承と展開

地域活性化の文脈における「つなぎ手」人材論の先駆として、敷田(2009)の「よそ者」論がある。敷田は、よそ者を固定的な属性ではなく、地域社会との相互作用において規定される「関係概念」として捉えた。敷田が整理した「よそ者効果」には、地域の再発見、誇りの涵養、知識移転などがあるが、これらの効果は常にリスクと背中合わせである。よそ者の「異質性」こそがイノベーションの源泉であると同時に、地域社会の秩序を乱す脅威ともなり得るからである。

ここに「よそ者のパラドクス」が生じる。地域社会はよそ者がもたらす「果実(活性化)」は切望するが、その前提となる「種(異質な他者の介入)」は拒絶したいという矛盾した選好を持つ。このパラドクスを解消するためには、単によそ者を招き入れるだけでなく、その異質性を地域社会が受容可能な形に変換するメカニズムが不可欠となる。

2.2 「地域内よそ者」概念の意義と課題

このパラドクスに対する一つの解答として、敷田(2009)は「地域内よそ者」という概念を提示した。これは、地域に根を下ろしながらも、何らかの経験(一度地域を出て戻ってくるUターン人材や、地域内で外部者と継続的に接触する人物など)を通じて、「異質な他者の視点」を獲得した地域アクターを指す(敷田, 2009)。彼らは、内部者としての正統性や文脈理解と、外部者としての客観的・批判的視点を一身に体現する、いわばハイブリッドな存在である(樋田, 2015)。

「地域内よそ者」という概念は、内部か外部かという二元論的な区分を乗り越え、両義的な存在の可能性を示唆した点で、よそ者論における理論的進展である。しかし、その研究は、その具体的な実践メカニズムの解明という新たな問いを提示している。「地域内よそ者」とは具体的にどのような人物像であり、彼らはいかなる実践を通じて、また、いかなるメカニズムによってその媒介機能を発揮するのか、という問いである。

2.3 ナレッジ・ブローカー論の限界

一方、社会ネットワーク論における「ナレッジ・ブローカー」は、社会集団の構造的空隙(Burt, 2004)に位置し、異なるグループ間での情報の流通を媒介することで、新たなアイデアやイノベーションをもたらす存在とされた。

構造的空隙とは、互いに直接的なつながりを持たないクラスター間の「穴」を指す。この穴を埋めるブローカーは、情報の流れを制御し、異なる文脈を持つ集団を接続することで、競争優位性や創造的な解決策を生み出すとされる。

しかし、地域社会における断絶の深層には、単なる情報の非対称性ととどまらない、より複雑な心理的力学が働いている。住民が異質な他者を拒絶するのは、単に他者がルールを知らないからではなく、押し付けられたルールに対する感情的な反発や、相互の顔が見えないことによる不信感が心理的コストとなり、強力な阻害要因となっているからである。したがって、ナレッジ・ブローカーが単に正しい情報を伝達したとしても、感情的な受容基盤が欠如している状態では、行動変容には至らない。ここに、有益な情報や知識の媒介に特化した従来型ブローカー機能の限界があり、感情に働きかける新たな機能が求められる。

2.4 関係性エネルギーの充填

ナレッジ・ブローカーの限界、すなわち「感情的断絶」を架橋するメカニズムとして、Collins(1993)の「相互作用儀礼連鎖(Interaction Ritual Chains)」がある。ここでは、社会的な連帯は、①身体的共在、②部外者への防壁、③共通の焦点、④共有された気分・感情が揃った相互作用の場において生成される。

これらの要素が揃い、相互の注意と感情がリズムよく同期すると、高揚した連帯感が生じ、儀礼は成功する。その結果、出力されるのが「感情エネルギー(Emotional Energy: EE)」である。EEとは、自信、熱意、行動へのイニシアティブであり、個人が社会的に活動するための燃料となる。逆に、儀礼が失敗した場合(強制的な儀礼やリズムの不一致)、EEは枯渇し、無気力や疎外感が生じる。

また、Owensら(2016)は、この概念を組織論に応用し、「関係性エネルギー(Relational Energy: RE)」を提唱した。REとは、他者との相互作用から得られる「心理的な資源」の高まりである。重要なのは、これが「個人の属性(カリスマ性)」ではなく、「相互作用の質」に依存する点である。そのREを高める存在が、「エナジャイザー(Energizer)」(Crossら, 2003)ないし、「エネルギー・ブローカー」(Owensら, 2016)である。それは、

単に明るい性格（カリスマ）である必要はなく、「質の高い相互作用」を通じて、相手に活力を与える存在である。Owensら（2016）は、REは、モチベーションが枯渇しやすい現代の職場において、従業員のパフォーマンスを維持する重要な資源であると論じた。

人口減少と高齢化が進む現代の地域社会においても、住民は「地域の維持」という困難で終わらなきタスク（労働）を背負っている。したがって、企業組織同様、地域社会においても、この「労働＝ケア」を遂行するために必要な他者との相互作用によって生まれるエネルギー（EE、RE）の枯渇は深刻な問題であり、その充填メカニズムは、組織同様、地域コミュニティの存続にとっても有用であると考えられる。

3 「地域編集」の理論的定式化

以上の先行研究を踏まえ、本稿ではナレッジ・ブローカー（情報の媒介）としての性質を持ちながら、エナジヤーやエネルギー・ブローカーとしての性質を持つ人材の機能として、「地域編集」という概念の定式化を試みる。

3.1 「編集」概念の曖昧さと汎用性

近年、地域活性化や地域イノベーションの現場において、「編集（Editing）」あるいは「地域編集」という言葉が頻繁に使用されるようになってきている。特に、雑誌『ソトコト』が特集として「地域の編集術」を取り上げ、関係人口の創出やローカルな魅力の発掘における「編集」の重要性を提唱してきた（ソトコト，2017）。そこでは、編集とは単なるメディア制作（雑誌やウェブサイトづくり）にとどまらず、地域に散在する資源（人、モノ、コト）を再解釈し、新たな意味や文脈を付与してつなぎ合わせる行為として捉えられている。

影山（2018）は、地域におけるエディターシップを「異なるコミュニティをつなぐ」機能として位置づけ、地域内外の関係性を再構築する実践として論じている。しかし、実践現場での汎用性とは裏腹に、学術的な文脈において「地域編集」の定義は依然として曖昧なままである。多くの場合、それは「企画力」や「コーディネート力」といった一般的な用語の言い換えに留まっており、その機能がいかなる社会的メカニズムによって地域に変容をもたらすのかについての理論的説明は不足している。

一方、出版論において「編集」の定義は蓄積されている。「編集工学」を提唱した松岡（1996）は、編集を「人間の活動にひそむ最も基本的な情報技術」と定義し、その本質を「関係の発見」に置いた。彼によれば、編集とは情報を「区別」し、その「あいだ」をつなげ、新し

く「関係づける」行為である。また、文化人類学者の山口昌男は、編集者の機能を単なる情報の運搬者（メッセンジャー）と、異質なものを媒介し触媒となる「メディエーター」とに区別した（山口，1983）。山口によれば、メディエーターとしての編集者は、秩序と混沌の間を行き来する「トリックスター」としての性質を帯び、既存の文脈を揺さぶり、新たな関係性を生み出す存在である。本稿では、こうした「触媒」や「揺さぶり」による関係性構築としての編集概念を継承しつつ、それを地域社会の分断の媒介という文脈に位置づけ直すことを目指す。それは、単なるメディア制作技術ではなく、コミュニティ内部の傷ついた関係性を修復・維持するという「ケア」の側面を含んでいる。

地域社会の断絶を架橋するためには、単に情報を伝えるだけでは不十分である。情報の伝達は、あくまで手段に過ぎない。真に必要なのは、その情報の編集プロセス自体を成功する「相互作用儀礼連鎖」(Collins, 1993)にし、参加者の間に枯渇していたエネルギー（EE、RE）を再充填し、新たな社会的紐帯を構築すること、すなわち「関係の編集」である。

3.2 情報の編集

地域編集における第一の側面である「情報の編集」とは、地域に散在する多様な資源——歴史的物語、伝統産業、特産品、人々の暮らし、忘れられた風景など——に光を当て、それらを選択・再解釈し、外部の受け手にとって魅力的で理解可能なストーリーとして再構成する実践である。これは、フリーペーパーやウェブサイトの制作、イベントの企画、商品開発といった具体的なメディア制作やブランディング活動として可視化される（宮副・他，2017）。しかし、これらは、単に地域のブランド価値を高めるだけでなく、ときに、地域の多様な構成員がともに課題解決に取り組む「共通の焦点」(Collins, 1993)として機能する。バラバラな個人が、一つの対象（教科書やポスター）を同時に注視することで、「相互行為儀礼連鎖」の第一段階がクリアされる。

3.3 関係の編集と社会関係資本の生成

「情報編集」する過程の中で、関係者の関係性を変容する「関係の編集」が起きることを示すのが本研究の目的である。関係の編集とは、「共通の焦点」を媒介として、身体的共在の場で「感情のリズム」を同期させる行為である。この同期が成功したとき初めて、個人の内面に「感情エネルギー＝EE」が生成される。

そして、生成されたEEが、特定のシンボル（団地や教科書）に結びつくことで、集団へのメンバーシップ感情（連帯）が固定化される。これが社会関係資本の実体

表1 地域編集の二重プロセス（筆者作成）

プロセス	機能	主なアクター機能	成果物
1. 情報の編集	資源（個人、関係性、地域）の可視化 共通の焦点の創出	ナレッジ・ブローカー （知識の媒介・翻訳）	共通の焦点 共有されたシンボル
2. 関係の編集	エネルギーの生成 社会的紐帯（人）の構築	エナジヤイザー エネルギー・ブローカー （感情の喚起・リズムの動機）	感情エネルギー（EE） 関係性エネルギー（RE） 社会関係資本

である。この、目には見えにくい橋渡し型社会関係資本の再構築こそが、「関係の編集」の核心であり、地域社会の自己変革能力を高めるためのエンジンとなりうる。

地域編集を構成する二つのプロセスは、並列的なものではなく、段階的な因果関係にある。①情報の編集は相互作用儀礼のための舞台装置（共通の焦点）を整えるプロセスであり、②関係の編集はその舞台上で展開される儀礼的パフォーマンス（感情の同期）である。このプロセスを経て、エネルギーや社会関係資本を生成するアクターを、本稿では「地域編集者」と仮説的に提示する（表1）。

地域社会における「よそ者」や「若者」は、異質な視点を持ち込み「リズム」を与えるが、それが既存のリズムと剥離していればエネルギーは減衰する。地域編集者は、両者のリズムを同調可能なレベルに「調律」する、いわばエネルギーのブローカーである。

4 分析の方法

4.1 比較ケーススタディ

次章では、前章までに提示した「地域編集」の理論的枠組み——すなわち、地域資源を可視化し共通の焦点を創出する「情報の編集」と、そのプロセスを通じて感情的エネルギーを生成し社会関係資本を醸成する「関係の編集」の二重プロセス——の妥当性を検証する。分析対象として、農村部における「地元住民と移住者」の関係を扱う京都府南丹市の「集落の教科書」と、都市部団地における「日本人高齢者と外国人若者」の関係を扱う埼玉県川口市「芝園団地」の比較ケーススタディを行う。

① 京都府南丹市「集落の教科書」:

- ・断絶の性質：農村部における「伝統的住民（地元）」と「移住者（よそ者）」間の暗黙知・慣習的ギャップ。
- ・介入アクター：NPO法人、集落支援員による複数アクターの支援。

② 埼玉県川口市芝園団地「多文化共生プロジェクト」:

- ・断絶の性質：都市部団地における「日本人高齢者」と「外国人（主に中国人）現役世代」間の言語・生活習慣・世代間ギャップ。

- ・介入アクター：学生ボランティア、自治会、UR都市機構によるネットワーク型支援。

4.2 分析手法

データ収集には、分析の妥当性を確保するため、①実践者による著書・報告書、②メディアや行政による外部評価的な記述、③公的統計による定量的データを突き合わせることで、多角的な現象把握に努めた。さらに、これらの資料から「情報の編集」が「関係の編集」へと転化する因果プロセスを抽出するプロセス・トレーシングを行った。

5 事例分析

5.1 事例①「集落の教科書」

5.1.1 事例地域の概要と課題

京都市北部に位置する京都府南丹市は、2006年に合併して誕生したが、人口は減少傾向にあり、約31,060人（総務省統計局, 2020）、65歳以上割合は約35%に達する（南丹市, 2024）。高齢化の進行により、伝統的な共同作業（普請）や祭礼の維持が困難になっていた。地域存続の危機感が外部人材の受容を不可避とする一方で、地元住民からすれば慣習を知らない移住者への警戒感もあった（田畑, 2022）。

5.1.2 「情報の編集」と「関係の編集」のプロセス

そこで2015年に誕生したのが、南丹市に拠点を置くNPO法人テダスと、南丹市世木地域振興会の協働で生み出された「集落の教科書」(世木地域版)である（南丹市地域振興課, 2019）。

「集落の教科書」は、区費の金額や共同作業といった集落ごとのルールをまとめた「地域の取り扱い説明書」である。その編集方針は、地域の良い面だけでなく、厳しい現実も含めた「ありのまま」をさらけ出すことで、移住後のミスマッチを防ぐことである。しかし、当初、その編集方針に地元住民から猛反発があった（田畑, 2022）。それでも制作に踏み切ったのは、「このままでは人口が減る一方だ」という住民サイドの「危機感」が

あったからだという。そこで、単にルールを羅列するのではなく、「強いルール」から「ゆるいルール」まで4段階のアイコンで分類・可視化した（2019年からは別の自治体の教科書で、5つめの「考え中」のアイコンを導入している）（田畑, 2022）。この分類は、地域住民自身が「このルールは本当に絶対に必要なのか？」と自問自答し、内部の規範を相対化するプロセスを誘発する装置として機能した。

こうした「情報編集」行為によって、「教科書」は、移住者と住民が互いに視線を合わせるための「共通の焦点」として機能した。直接向き合えば角が立つ関係であっても、「教科書」という第三の対象を介することで、間接的な対話が可能になる。

しかし、その真価は、制作プロセス自体が「関係の編集」として機能する点にある。教科書は、NPOスタッフが一方的に作成するのではなく、住民を交えて編集会議やワークショップを繰り返して共創される。住民が編集作業に参加し制作が進められることで、住民自身が地域のルールや課題について対話し、創造的なアイデアを出し合う場が生まれる（田畑, 2022）。さらに、ヒアリングやアンケートでできるだけ多くの住人に関わってもらう。

この会議や対話の場は、Collins（1993）の言うように、リアルな「身体的共在」の場であり、住民たちが「地域の存続」という共通の危機感（共有された気分）を持ち、「教科書作成」という共同作業（リズムの共有）を行うことで、連帯感を生み出したといえる。また、NPOスタッフは、住民の不満や不安を聞き入れつつ、「ありのままを出すことが誠実さであり、ミスマッチを防ぐ」というビジョンを提示し、住民のモチベーションを高める「エナジャイザー」（Crossら, 2003）として振る舞ったと考えられる。

このプロセスを通じて生成されたのは、冊子というモノ以上に、住民たちの高まった感情エネルギー（EE）である。それは、「全国発の取り組み」を行う「英断」を生んだ。そんな、世木地域で生み出された最初の「集落の教科書」の成功事例が、後に全国各地で「集落の教科書」が展開されることにつながった（能登スタイル, 2019）。

5.2 事例②「芝園団地」

5.2.1 事例地域の概要と課題

埼玉県川口市は、東京都に隣接するベッドタウンとして発展してきた。近年、外国人住民が急増しており、市の最新統計によれば2025年時点で外国人住民は約48,000人、総人口の7%を超える（川口市, 2025）。その象徴的な場所が、JR蕨駅近くに位置するUR都市機構の芝園団地である。1978年に建設されたこの団地は、約2,500戸、約4,500人が暮らす大規模団地だが、住民の半分以上を

外国人（その多くは中国人）が占める多文化集住地域となっている（大島, 2019）。そのため、メディアによって「チャイナ団地」と特定のレッテルを貼られてきた。当時、自治会事務局長を務めていた岡崎（2022a）は、外部からの見学者が「荒れた団地の光景が見られることを期待して来る」ことに懸念を示していた。ここから、外部メディアによる偏った「情報」が、地域の実像を歪め、住民間の分断を固定化させていた状況が見て取れる。

なお、川口市における多文化共生の課題を論じる際、近年社会問題化しているクルド人住民との軋轢について触れる必要がある。しかし、クルド人問題が、就労環境や在留資格といった国家レベルの法制度と結びつき、居住実態も分散的であるのに対し、芝園団地は、団地という物理的に境界づけられた居住空間内での生活摩擦に焦点がある。

本稿が着目するのは、よりミクロな住民レベルでの自律的な関係構築のメカニズムである。Collins（1993）も、物理的な共在と、外界からの隔離を儀礼成立の要件にしている。そこで、空間的凝集性が高く、自治会という基盤が存在する芝園団地を対象として選定した。

5.2.2 「情報の編集」と「関係の編集」のプロセス

この複雑な断絶を架橋する試みが、自治会と学生ボランティアが連携して進める多文化共生のまちづくりである。

まず第一歩として、生活ガイドの多言語化（日本語、中国語、英語、やさしい日本語）や、ゴミ出しルールをイラストで分かりやすく示したポスターの掲示といった「情報の編集」が行われた。これにより、言語の壁に起因する誤解を減らす一定の効果があった（岡崎, 2022b）。

しかし、実践の核心は、顔の見える関係を構築する「関係の編集」にある。その中核を担うのが、岡崎氏ら自治会役員と、2015年に結成された学生ボランティア団体「芝園かけはしプロジェクト」の存在である（東京都多文化共生ポータルサイト, 2024）。当初、団地内の共有スペースにあるテーブルとベンチには、外国人に対する誹謗中傷の落書きが刻まれていた。「芝園かけはしプロジェクト」は、この「負の遺産」を隠蔽するのではなく、新たな意味を付与するアイデアを提案した（岡崎, 2022a）。

この実践の結果、空間の意味は劇的に変化した。岡崎（2022c）は、「もし、ヘイトスピーチが記された落書き机のままであれば、誰も寄り付かない場所だったであろう」と述べつつ、現在は子供の学習や外国人の食事の場として利用されていることを報告している。

また彼らは、料理を一緒につくる、言語を教え合うといった多様な交流の「場」を創出した。具体的な「コト」を通じて、これまで没交渉だった異なる背景を持つ住民

が、互いの文化を理解し、信頼関係を築くための土台が出来上がっていった（東京都多文化共生ポータルサイト、2024）。

こうした取り組みは、中国人住民の変化も促した。とある住民は、嫌がらせをした日本人高齢者を現行犯で捕らえ、自ら清掃させた上で警察に通報し、解決に導いた。特筆すべきは、この被害を経てもなお、彼が「日本人全体を嫌いになったりしない」という発言をしたことである（岡崎、2022c）。この言葉は、顔の見える個人間の信頼が構築されていれば、一部のトラブルが全体の拒絶へと繋がるステレオタイプの連鎖を断ち切れることを示している。岡崎（2022a）が述べるように、「お互いに静かに暮らせる関係」としての「共存」から、「お互いに協力する関係」である「共生」へと転換する兆しが見えた瞬間である。

最後に、関係者のエネルギーが全体へと波及していく象徴的な場面として、年末の「餅配り」が挙げられる。本来は希望者のみへの配布であったが、余った餅を受け取りに来なかった自治会員へ配るという決定がなされ、外国人を含む自治会役員で各戸を訪問するなど自発的な行動につながった（岡崎、2022c）。「社会的断絶」は自然には解消せず、むしろ放置すれば構造的な「憎悪の連鎖」を生む。芝園団地の改善例は、偶然ではなく、意図的な「地域編集」という介入があったからこそ、負の連鎖が断ち切られたといえる。

こうした取り組みが認められ、芝園団地は2017年度の国際交流基金による「地球市民賞」を受賞した（UR都市機構、2018）。

6 考察：地域編集者によるエネルギー・マネジメント

6.1 デ・エナジャイザーの連鎖を断ち切る

二つの事例分析から明らかになったのは、単なる情報の伝達だけでは、感情的な断絶を乗り越えることは困難であるという点である。

南丹市の事例における「猛反発」や、芝園団地における「生活トラブル」への不満は、論理的な説得だけでは解消し得ない感情的なエネルギーの滞留を示している。しかし、両事例におけるアクターは、ネットワーク上の「エナジャイザー」として機能し、デ・エナジャイザー（不満分子や無関心層）（Crossら、2003）による負の連鎖を断ち切り、正のエネルギー連鎖を始動させる触媒として機能したといえる。

6.2 「共通の焦点」としての成果物と迂回プロセス

南丹市の「教科書」や芝園団地の「イベント」といっ

た成果物は、対立しがちな当事者同士の注意を、相手の人格や属性から、「第三の対象物（モノ・コト）」へと逸らす機能を持っていた。直接向き合えば角が立つ関係であっても、共通の作業対象を介することで、間接的な協働が可能になる。

また、その成果物が「共通の焦点」(Collins, 1993)として十全に機能するための「改善」努力が、リズムの同調と共有された気分の醸成を促し、結果として信頼醸成（関係の編集）につながったのではないかと。

外国人住民との共生における課題の本質は、言語的なコミュニケーション能力の欠如よりも、相互の存在承認の欠如に起因するケースが多い。芝園団地の場合、「ゴミ出し」や「騒音」トラブルはあったが、そこには「自治会」という物理的・組織的な「編集の場」があった。だからこそ、学生ボランティアが介入し、「ポスター」や「交流イベント」を展開することができた。共通の焦点（団地の環境改善）が設定しやすかったのである。

一方、クルド人問題の場合、問題が市内のあらゆる場所で散発的に発生するため、「編集の場」が固定できない。また、法的地位の不安定さが、公的な「教科書」づくりや「イベント」への参加を躊躇させる。ここでは「情報の編集（共通の焦点化）」が機能不全に陥っており、その結果、相互行為儀礼も成立しない。

以上のことから、共通の焦点をうまく設定することが、関係改善にとっていかに重要かがわかる。

6.2 地域の血流の改善

構造的な断絶や社会的断絶がある状態とは、コミュニティの血管が詰まり、栄養（信頼や協力）が行き渡らない壊死寸前の状態である。各アクターは、ここに介入し、まず自らのエネルギーをポンプとして送り込む。そして、相互作用儀礼というバイパス手術を行い、異なるクラスター間に新たな感情の回路を開通させる。

一度、血流（REの循環）が回復すれば、コミュニティは自律的に治癒力を発揮し始める。南丹市では住民自身がルールの見直しを始め、芝園団地では住民による自発的な交流が芽生えた。これは、外部からのエネルギー注入が、内部のエネルギー生産システムを再起動させたことを意味する。

また、事例間の比較は、アクターのあり方の多様性を浮彫りにする。「集落の教科書」では、NPOという外部組織と集落支援員、地域おこし協力隊などのサポーター人材、そして地元の地縁組織が、「芝園団地」では、自治会、学生ボランティア、UR都市機構といった複数のアクターが連携する「アクターネットワーク」とも言うべき構造が見られた。性質の異なるアクターがそれぞれの役割を分担し、ネットワークとして機能することで、

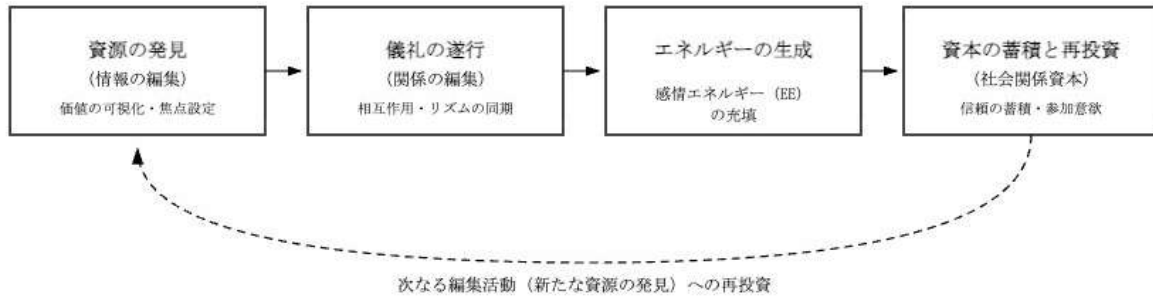


図1 地域編集の循環プロセス (筆者作成)

より多層的な断絶に対応できたのではないだろうか。この知見は、課題の複雑性に応じて、地域編集の担い手像が個人からネットワークへと拡張しうることが示唆している。

6.3 分析：地域編集による関係性構築

以上の分析に基づき、地域編集による関係性構築のメカニズムをモデル化したものが図1である。

地域編集は、直線的なプロセスではなく、エネルギーの循環モデルとして捉えられる。まず「情報の編集」によって、住民とよそ者が共に視線を向けることができる「共通の焦点」を創出する。次に、この焦点を媒介として物理的な共有と共同作業の場（相互作用儀礼）を設けることで、参加者の間にリズムの同調を生み出す。この儀礼が成功することで、バラバラであった個人がエネルギーを生産し、それが新たな社会関係資本として地域に蓄積される。いわば地域編集とは、情報を媒介としてエネルギーを生成・循環させる、動的なプロセスである。

しかし、このプロセスが成立するためには互いに心理的ハードルをいくつも超えなければならない。それはときに、相互の偏見や価値観の変容が必要である。紛争解決学における「トランスフォーマティブ・メディエーション (Transformative Mediation)」(Folger & Bush, 1996) は、メディエーション (調停) の目的を、単なる合意形成 (解決) に置くのではなく、当事者自身の「変容」に置くべきだと主張した。

事例において、それぞれのアクターは Folger & Bush (1996) が指摘する二つの次元で関係者を変容させる存在と言える。

- ・エンパワーメント：南丹市の住民が自分たちの文化に自信を持ち、芝園団地の住人が肯定的感情を得るプロセス。これは、当事者が自らの状況をコントロールできるという感覚 (高い EE) の回復である。
- ・承認：エンパワーメントされた当事者が、他者 (よそ者や外国人) の視点に関心を持ち、受け入れようとする態度の変容。

地域編集とは、コミュニティ・レベルで展開されるトランスフォーマティブ・メディエーションの実践とも言えるのではないか。「関係の編集」とは、単に、コミュニティの構成員の「配置転換」を行うわけではない。地域コミュニティにおいて、循環ポンプの役割を果たし、構造的空間に血流 (エネルギー) を送り込み続け、構成員の関係性の「質」を改善することこそが「関係の編集」の本質であるといえる。

7 結論とインプリケーション

本稿では、企業組織論の概念を地域社会の領域へと援用した。Owens (2016) らが提唱する関係性エネルギー (RE) は、主に企業内における従業員のエンゲージメント向上という文脈で語られてきた。しかし、本稿の分析は、この概念が多様な主体が共存する地域コミュニティにおいても有効であることを示唆した。特に、企業のような同質性とヒエラルキーが存在しない地域社会においては、金銭的報酬や職務命令によって人々を動かすことはできない。そのため、相互作用を通じて生成される関係性エネルギー (RE) こそが、住民を地域へと繋ぎ止める資源となるのではないか。本稿は、地域イノベーションの源泉を、単なる情報や知識のブローカリングだけでなく、その結合を持続させるためのエネルギー生成プロセスに見出した点に意義がある。

しかし、この実践を安易に理想化するべきではない。地域編集、特にその核心である「関係の編集」という営みは、本質的に一種の「ケア労働」としての側面を持つ。ケアとは、政治学者ジョアン・トロントの定義によれば、私たちが可能なかぎりよく生きていくために、「私たちの『世界』を維持し、継続し、修復するすべてのことを含む、種としての人類の活動」である (トロント, 2020)。異なる価値観を持つアクター間の対話を促し、コミュニティの断絶を修復しようとする地域編集者の労働は、まさにこの「世界の修復」というケアの営みに他ならない。

だが、現代社会においてケア労働は、その重要性にも

かかわらず経済的に過小評価され、しばしば不可視化される。同様に、「関係の編集」という労働も、具体的な成果物の陰に隠れ、その価値が正当に評価されにくい。それはしばしば、特定の個人の情熱や自己犠牲の上に成り立っており、持続可能な活動として制度化されるには至っていない。

このケア労働としての地域編集を持続可能なものにするため、行政や中間支援組織は何をすべきか。本稿は、以下の二つの具体的な制度設計を提言する。

第一に、地方自治体や支援組織は、地域リーダーの評価軸を「事務処理能力」や「情報発信力」から、「エネルギー・マネジメント能力」へとシフトさせるべきである。誰がその場にいるだけで周囲が明るくなるか、誰が対立

をエネルギーに変えられるかという「エナジャイザー」としての資質を見極め、支援する必要がある。

第二に、地域活性化事業において、成果物（パンフレットや施設）そのものよりも、その制作プロセスにおける「儀礼の質（参加者の熱量）」を重視すべきである。どれだけ立派な計画書があっても、参加者のEE・REが低下していれば、その事業は持続しない。

地域編集とは、この見えざるエネルギーの奔流を読み解き、導く、社会的技術といえる。断絶が進む現代の地域社会において、人々の感情エネルギーを再充填し、共に生きるための活力を生成する「エネルギー管理人材」は、今後ますます必要とされていくだろう。

参考文献

- Burt, R. S. (2004) 'Structural Holes and Good Ideas', *American Journal of Sociology*, 110 (2), pp.349-399.
- Collins, R. (1993). *Emotional Energy as the Common Denominator of Rational Action*. *Rationality and Society*, 5 (2), pp.203-230.
- Cross, R., Baker, W., & Parker, A. (2003). *What creates energy in organizations?* MIT Sloan Management Review, 44 (4), pp.51-57.
- Folger, J. P., & Bush, R. A. B. (1996). *Transformative Mediation and Third-Party Intervention: Ten Hallmarks of a Transformative Approach to Practice*. *Mediation Quarterly*, 13 (4), pp.263-278.
- 樋田有一郎 (2015)「社会関係資本と地域資源の利活用による地域人材育成—島根県離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業の取り組み—」『青山学院大学教育人間科学部紀要』6, pp.1-20.
- 影山裕樹 (2018)『ローカルメディアの仕事術』学芸出版社.
- 川口市 (2025)「かわぐちの人口第4表年齢別人口」『川口市ホームページ』, <https://www.city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01020/010toukei/12/5700.html>, 2025年12月1日アクセス.
- 松岡正剛 (1996)『知の編集工学』朝日新聞出版.
- 宮副謙司・佐伯悠・藤井祐剛 (2017)「GHIL フレーム—地域価値の創造に向けた地域資源の着眼・編集の方法論—」『日本マーケティング学会ワーキングペーパー』 Vol.3, No.17. pp.1-17.
- 南丹市 (2024)「南丹市地域経済動向レポート」『南丹市商工会』2024年4月公開.
- 南丹市地域振興課 (2019)「日吉町世木地域 集落の教科書」<https://www.nancla.jp/wp-content/uploads/2019/06/seki-kyoukasyo5.pdf>, 2025年9月1日アクセス.
- 能登スタイル (2019)「【ダウンロードできます！】七尾市高階地区 “集落の教科書” 第一版が完成しました！」『能登半島・七尾移住計画』, 2019年4月2日公開. <https://notostyle.jp/?p=772>, 2025年9月1日アクセス.
- 岡崎広樹 (2022a)『外国人集住団地——日本人高齢者と外国人の若者の“ゆるやかな共生”』扶桑社.
- 岡崎広樹 (2022b)「「共存」から「共生」へ—外国人住民を交えた地域づくり」『自治体国際化フォーラム』354号, pp.12-13, 2022年7月発行.
- 岡崎広樹 (2022c)『団地と共生——芝園団地自治会事務局長2000日の記録』論創社.
- 大島隆 (2019)『芝園団地に住んでいます：住民の半分が外国人になったとき何が起きるか』明石書店.
- Owens, B. P., Baker, W. E., Sumpter, D. M., & Cameron, K. S. (2016). *Relational energy at work: Implications for job engagement and job performance*. *Journal of Applied Psychology*, 101 (1), pp.35-49.
- パットナム、ロバート・D. (2006)『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』柴内康文訳, 柏書房. (Putnam, R. D. (2000) *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster.)
- 柴崎浩平・中塚雅也 (2018)「地域おこし協力隊のリアリティ・ショックと克服過程」『農業問題研究』54 (2), pp.25-35.
- 敷田麻実 (2009)「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』第9号, pp.79-100.
- 総務省統計局 (2021)「令和2年国勢調査 人口等基本集計結果」『e-Stat』, 2021年11月30日公表.
- 総務省 (2025)「令和6年度地域おこし協力隊の隊員数等について」, 2025年4月4日公表.
- ソトコト (2017)「特集：地域の編集術」『ソトコト』2017年5月号, 木楽舎.
- 田畑昇悟 (2022)『「集落の教科書」のつくり方：移住者を助けるガイドブック』農山漁村文化協会.
- トロント、ジョアン・C. (2020)『ケアするのは誰か？：新しい民主主義のかたちへ』岡野八代訳, 白澤社. (Tronto, J. C. (2015) *Who Cares?: How to Reshape a Democratic Politics*, Brown Democracy Medal.)
- 東京都多文化共生ポータルサイト (2024)「芝園かけはしプロジェクト」『TIPS』, 2024年3月29日公開. https://tabunka.tokyo-tsunagari.or.jp/yasanichi/jirei/2024/03/booklet_03.html, 2025年9月1日アクセス.
- UR都市機構 (2018)「川口芝園団地が「地球市民賞」を受賞」『UR都市機構ウェブサイト』, 2018年1月23日公開.
- 山口昌男 (1983)『語りの宇宙：記号論インタビュー集』冬樹社.